
女の子になった少年剣士

彰子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子になつた少年剣士

【Nコード】

N2918Y

【作者名】

彰子

【あらすじ】

幼き日から、強くなることだけを心の糧として生きてき少年剣士アルスは、敗北に傷心し、死に場所を探していた。彼が毒薬を飲み目が覚めると女の子になっていた！？殺伐とした世界しか知らなかった少年が家族愛そして知り合った少年との恋愛を通して、自分の生きる道を見つけていく！

第1話 挑戦と挫折

とある宇宙のとある惑星にある小さな大陸。

ここでは、サン族とムーン族という2つの民族が覇権を巡って戦争していた。

戦争は先進的な火器をもつサン族の圧倒的優位に進み、ムーン族は土地を失い、ついには森の奥ある小さな王国をわずか一つ残すのみとなった。

物質的にも精神的にも追い詰められたムーン族。

彼らの心によりどころになっっていたのは、古代の預言者が遺したある古文書の一節だった。

『ムーンの救世主、我が死より1000年目に一人生誕す。彼の武勇によって一族は悪しき蛮族を打ち破り、やがて平和な世界が訪れるであろう』

その1000年目が翌年へと近づいていたのだ。出どころのうさぐさい書物ではあったが、信じる者は多かった。王族の中にすら信奉者がいるくらいである。

書によると、救世主を産むことができるのは、特定の条件を満たした聖父と聖母だけであるという。

男の条件は、王国で開かれる剣術大会で優勝すること。女の条件は

舞踏会で剣術大会の優勝者に指名されることである。

この記述に基づき、ムーンの王は剣術大会と舞踏会を共に開催することに決めたのだ。

この決定に対し、國務大臣は王に訝しげな顔をして尋ねた。

「あのような迷信を信じるなどは、賢明な王らしからぬ判断ですな」

「わしとて、あのようなものを端から信じておらんよ。しかし、あれが民の心のよりどころになっているのは事実だ。これがきっかけで男は武術に励み、女も文化的な活動に興味をもってくれたらそれで十分。今は、民の士気を下げないことが肝要なのだ」

「もし、思惑どおりに救世主となるべき子どもが生まれ健やかに育たなければ？」

「そのときはそのときで次の手を考えよう」

武闘大会には優勝候補とされている者が2人居た。

1人は街の郊外の小さな道場でめきめきと頭角を現している豪傑リーズ。

男らしいごつい顔つきをした背の高い青年だ。女性には密かに人気があったが、本人がシャイなせいか、ご縁はなかなかない。

もう1人は貴族にも一目置かれている名門剣術道場の師範代の息子であるアルス。

師範代である父親はなかなかの豪傑であるが、本人は母親似の中性的な顔立ちの美少年である。

あくまで親の七光りでの評価であり本人の実力はさほどではないとも言われている。

リーズとアルス、出自は名門道場と零細の道場とそれぞれ全く違い、普通に暮らしている分には互いに接点がないはずであるはずだが、本人たちは旧知の仲であった。

幼少期、親から剣術の稽古を仕込まれるよりも昔に、偶然、河原で出会ったことがきっかけで、毎日のようにチャンバラごっこをやったのだった。

結果は10回勝負して、10回ともリーズの勝利。遊びのチャンバラでワンサイドゲームではつまらないので、リーズはハンデを与えたのだがそれでも10回中8回はリーズが勝ったのだった。

そして、アルスは悔しさのあまり泣きじゃくり、リーズがそれをなだめるのがいつものやりとりだった。

そういった因縁があるので、この大会に向け、アルスにとっては、幼き頃の借りを返す機会であると闘志を燃やし、リーズは懐かしい仲間との遊びの続きをするようなノスタルジーに浸っていたのだった。

た。

剣術大会当日、リーズとアルスはそれぞれ順調にトーナメントを勝ち抜き、下馬評どおりに決勝戦はこの両者のカードとなった。

「泣き虫だったお前がよくここまで強くなったもんだな」

「僕にとっては君に勝つことだけが目標だった。今日は絶対に負けない！」

口上が終わると、互いに構え、剣と剣がぶつかり合った。勝負がついたのは一瞬だった。アルスの剣の刃先は折れ、宙に舞った。

リーズは剣の先をアルスの顔先に突きつけた。

「勝負有り！勝者リーズ！」

第2話 女の子になっちゃった!?

「リーズにはやっぱり勝てないや……」

試合後、アルスは傷心のままお城から遠く寂れた村にいた。質素な鍛冶屋がたたずんでいる以外には建物は無い。

しばらく、彼はしばらく熟考していたが、ついに思いつめたように手投げカバンの中から、薬のビンを取り出した。

アルスには試合前に、親から言いつけられていたことがあった。剣術大会で優勝できぬものが帰る家はない。

敗れたものは死をもって償え、と。もし、死ななかったら、刺客を差し向けられ、不名誉な形で殺すと。

薬のビンは知り合いの錬金術師からもらったものだった。

実験中のものではあるが、これを飲むと苦しまずに死ねると聞かされていた。家の錠には絶対に逆らえない。アルスはビンから、錠剤を5粒ほど取り出し、そのまま飲み込んだ。

（熱い……。体が燃えるように熱い。全身が、頭の前からつま先に至るまでが焼け付くようだ。苦しまずに死ねると聞いたのは嘘だったのか）

自害の手段を誤ったのかとアルスは後悔をしはじめていた。しかし、

しばらくして、意識が朦朧としはじめた。

それは睡魔に似ていた。ああ、これでやっと楽になれるのかと彼はまどろみに身を任せた。

……

アルスは目を覚ますとベッドの上に寝かされていた。

傍らには心配そうに中年の女性が顔をのぞきこんでいた。部屋の調度は暖色のものが多く、ぬいぐるみもいくつか飾られている。

香水のにおいが漂う。おそらく、女性の部屋なのだろう。

「ここは、街外れにある小さな鍛冶屋よ。大丈夫かい？」

（鍛冶屋……）

アルスは鍛冶屋の前で薬物自害を試みたことを思い出した。それがこうして、ここにいるということ、倒れているところをこの家人が助けてくれたのだろう。

アルスは自分が情けなくなった。戦いに敗れ、そのけじめもつけることすらできずなんと情けない人生だろうと。

「顔色があまりよくないようだからしばらくここで寝ときなさい。

お嬢ちゃん」

お嬢ちゃん。懐かしい響きだった。

アルスは中性的な顔立ちをしているせいか、幼少期は女の子と間違えられることがしばしばあった。

第二次性徴が過ぎて、男らしい体つきになるとさすがにそのようなことはなくなっただが、そのような呼び方をされると懐かしさを感じるのだった。

昔は女の子と間違えられるとムキになって男だと反論したものだったが、今のアルスにはそのような気力は残っていなかった。

身体を起こし、窓の外を見やると、牡丹雪が降り、もみの木に積もっていた。美しい光景だった。

アルスは自分の身の振り方ばかりを考えて、周囲を見る余裕がなかったせいで、こんな小さな感動すらも見逃していたのだった。

美しい景色から目を外し、うつむくと「おや？」とアルスは思った。身につけていたのはレースのついたピンク色のパジャマ、どう見ても女性用のものである。

男としての自我をもつアルスは急に恥ずかしくなった。

「おばさん。介抱してもらっている身で、こんなことを言うのも、なんです。べ、別の服はありませんか？ちよっとこの服は恥ずか

しいですっ!」

「すまないね、あたしが持っている寝巻きはこれともう一着しかないんだよ。そのもう一着は洗濯してまってるし。あとあとは息子と夫の男物の寝巻きしかないよ」

「だから僕は男……!」

身振り手振りをしながら、必死でアルスが説明しようとしたそのとき、肘のあたりにやわらかい異物が当たった。

それは男の身体についているはずのない膨らんだ胸だった。股の間を確かめてみるとついていべきものがなかった。アルスは思考が停止して動きが固まった。

「大丈夫かい?」

「鏡があれば見せてもらえますか?」

「はいよ」

おばさんは手近にあった小タンスの引き出しから、手鏡を取り出し、手渡した。

そして、アルスがおそるおそるのぞくとそこには見知らぬ少女の姿が映っていたのだった。睫毛が長く、丸っこい顔、肩まで伸びたロングの髪の毛。ほんのりと赤らんだ頬。試しに、アルスがはにかんでみると鏡の向こうの少女もはにかんだ。

「これが僕……?」

「自分の顔に見覚えがないって……。あなた、もしかして記憶喪失かい？」

第3話 少年レオと家庭の団欒

「あんだ、もしかして記憶喪失かい？」

記憶は失ってないとアルスは否定しようとしたが思いとどまった。

このまま、自分が記憶喪失ではないことを主張したらどうなるだろうか。

当然、素性や身の上を話さねばなるまい。

そうすると、道場の人間が呼ばれ、この家に押しかけてくるかもしれない。

そう予測すると、アルスにとっては正体を明かすことにメリットがないものだった。

むしろ、赤の他人のような姿になっているのだから、このまま別人になりすました方がいい。そう思ったのだ。

「はい、そうです。私、自分がどこから来た誰なのか、全く思い出せないのです」

「名前も思い出せないのかい？」

「はい」

アルスは嘘をついたことで良心がずきりと痛んだ。

これで、自分の正体がますます名乗りにくくなったのだった。

「母さん。お客さんが来ているよー」

「はいはい。どちらさんだろうねえ」

女性が部屋を出ていき、入れ替わりに男の子が入ってきた。

おそらく、年頃はアルスより1つか2つくらい年下だった。

そして、アルスはこの男の子に見覚えがあった。

(最近どこかで会ったような……)

しかし、それがどこなのか全く思いだせないのだった。

「よ、よう……」

「はじめまして」

ぶっきらぼうにあいさつしてくる男の子にアルスは優しく微笑みかけ、丁寧にお辞儀で返した。

これで少しは女の子っぽく装えるだろうという計算があった。

すると、男の子は挙動不審にうつろつきまわり口をもごもごさせた。

「お、俺の名前はレオナルドって言うんだ！レオって呼んでくれよなっ！」

それだけを言うと、ぎこちなくピースサインを作り、そのままそくさと部屋から出て行った。

不思議に思っていると、しばらくして、おばさんが戻ってきて言った。

「うちの息子、レオって言うんだけども、何か妙なこと言わなかったかい？」

「いいえ。少しだけ、緊張をしているみたいだけども、別におかしな様子はなかったですよ」

「そうかい。まあ、緊張するのも無理もないね。あの子、同世代の女の子を見るのははじめてだから」

「そうなんですか？」

「ああ、この集落の近くにはかつて、鉱山があったんだよ。昔はともよくとれるものだから、若い人足がたくさん働いて賑わったものさ。けども、二十年ほど前にめばしい鉱物は掘りつくしてしまっただようでね。産業がなくなって、若い人はどんどん離れていってここに残ったのは昔から住んでいる年寄りばかりさ。ここに住んでいる若い子は、もうレオ以外には、男女の兄妹が2人いるだけさ。若いといってもまだ5歳と3歳なんだけどね」

おばさんは自嘲気味に苦笑いをした。

「そんな環境で育ったものだから、あの子は女の子とどう会話していいのか分からないのさ。無礼な態度をとるかもしれないけど許してやっておくれよ」

「あはは……」

本当は女の子じゃないんだよという含みを持たせた愛想笑いをアルスはしながらも、とんでもないところに来てしまったと思ったのだった。

その日の夕食、食卓を囲っているのはアルスとおばさんとレオナルド、そしてレオナルドの父親であるご主人の4人。

出されたのは、トマトをふんだんに使ったミネストローネだった。

オニオン、ポテト、セロリ、ズッキーニをはじめ多彩な野菜が入っている。

産業がない貧しい村という割には栄養バランスを考えた贅沢なスープだった。

「わあ！おいしそう！いただいていいですか？」

アルスは、少々大きさに驚いてみせた。男のくせにかわいこぶりっこしている自分自身に内心苦笑いしながら。

「はいはい。どうぞ。たくさん、召し上がってくださいな」

「お、俺もいただきます!」

レオナルドは自分の家の食卓なのに緊張しているようだった。

「ところでお嬢ちゃん。名前はなんていうんだい？」

ご主人から話しかけられる。

「あ……えっと」

アルスという名前は男でも女でも通用する名前ではあったが、正直に名乗ることには彼には抵抗があった。

こんな僻地とはいえ、いつ、道場の刺客が来るか分からないからだ。

「名前は覚えていません。記憶を失ってしまして」

「そうか。じゃあ、当面はアリシアって名前を名乗ってみてはどうだ?うちに、もし、女の子が生まれたらつけようと思っていた名前だ」

「ありがとうございます」

アルス、いや、アリシアはにっこりとほほ笑んで返答した。

食事もおおかた食べ終わり、だんらんムードになっていたころ、激しく扉を叩く音が響いた。

「こんな夜更けに誰だろうね」

おばさんが席を離れて応対に出た。

しばらく、おばさんと訪問者が口論しているのを見て、まずは主人、次いでレオナルド、最後にアリシアが玄関に向かった。

「だから、うちにはそんな人は居ません」

おばさんと言いあっていた相手にアリシアは見覚えがあった。

全身に黒いローブをまとい、その隙間から垣間見える鋭い目つき。マリファナの常用で黒ずんでしまった歯。

彼の名はゴルト、アルスと同じ剣術道場の生徒で、本業は刺客をやっている男だ。

この男がこの村を訪れる理由としてアリシアに考えられることはただ一つだった。

彼（女）が死んだのを確かめに来たのだ。

アルスが試合後に死に場所を探していたとき、尾行の気配を感じたので、なるべく撒くように歩き、振り払ったつもりでいたのだ。

しかし、どこかで痕跡を残してしまったのだらう。

こんなところまでつきとめられてしまっていた。

アリシアはゴルトと目が合い思わず体が強張る。

（バレたか？）

「お嬢ちゃん、どこかで会いませんでしたかな？」

「い、いいえ！」

「そうか、気のせいか。その怯えたような目つき、どこかで見覚えがあるのだが」

そう冷たい目つきで言われた瞬間、アリシアは全身が震えた。

「とにかく、うちにはアルスという人は居ませんからお引き取り願えませんか？4人家族でつましやかに暮らしているだけなんです」

おばさんがそう言うと、ゴルトはうつむき「分かりました」と一言だけ残すと、あっさりと引き下がった。

（納得をしたふりをしているだけだ。やつはもう一度来るつもりに違いない）

アリシアはそう直感したのだった。

第4話 2年後の約束

夜更けすぎ、アリシアは荷物をまとめて、鍛冶屋の家を発った。

これ以上、この家に居たらみんなに迷惑をかけてしまう。

そう判断してのことだった。

(ごめんなさい。本当はお礼の一つは言わなきゃいけないんだと思う。だけど、そんなことしたら、やさしいこの家の人たちはみんなして僕のことを引きとめてくれるだろう。そうなると、きつとその言葉に甘えてしまって、結果的にみんなに迷惑をかけてしまう)

アルスは幼いころから、剣術の達人となるように親から厳しく躾けられてきた。

愛だの情だのといったものはなるべく排し、朝も晩も、ひたすら戦うことだけを考えながら生きてきたのだ。

だからこそ、夕方に味わった家族団欒はアルスにとっては衝撃だった。

修羅の道しか知らなかったアルスにとって、家庭とは殺伐としているものだという彼の常識だった。

そして、その常識がたった一晚の食卓で崩れ去っていったのだ。

（本当はあの家族にもっと甘えたかった。だけど、僕にはそれを享受する資格はない）

雪が降り積もる中、村の出入り口である門の前に大きな人影をアルスは見つけた。

その人影の正体はアルスが予見していた通りの人物だった。

「やあ、鍛冶屋の家のお嬢ちゃんじゃないか。どこに行くつもりかい？」

（ゴールド……）

アルスは心をかき乱されつつも平静を装った。

「街に買い物にいくつもりです。薬草を切らしてしまっ……」

「こんな夜更けにかい」

「ええ」

横を通り過ぎようとしたとき、ゴールドはおもむろにアルスの腰に手を回し、抱き寄せた。

必死に抵抗するが女の体では引きはがすのは無理だった。

「気が弱いくせに無理に強がるうとするあたりは、あまり変わってないね、アルス坊ちゃん」

「アルスって誰ですか？私の名前はアリシアです！離してください！」

女の体ではこんな甲高い声を出せるのかと自分でもやや驚きながらも、アルスは村娘の演技を続けながら抵抗した。

「そうだよ。この目つきだ。この子犬のように怯えた目つき、これこそまさしくアルス坊ちゃんだ」

「私はそんな人じゃありません。離してくださいゴルドさん！」

そう言っつて、アルスは「しまった！」と思った。

「なんで、俺の名前がゴルドだつて知っているんだ。この村では本名を名乗らずに搜索してきたはずだが……」

痛いところを突かれ、アルスは沈黙してしまった。

「錬金術師の作った怪しい薬でも飲んで別人になりすましたとかそのあたりか。しかしまあ、坊ちゃんがこんな可愛い女の子になつていたなんて驚いたよ。おおかた、あと2年もすれば俺好みのいい女に育つんじゃないか。そうだ。いいことを考えた。道場には生きていたことは黙っておいてやるから、俺の女にならないか」

それはアルスにとって、ぞっとするような提案だった。

男に慰み者にされてしまう。しかも、こんな魂の汚れた男に。

「嫌だ！誰がお前の言うことなんか！」

「あの一家を皆殺しにすると言ってもか？」

「なっ！」

それはアルスにとって、自分の命を取られる以上にクリティカルな脅し文句だった。

「卑怯者め……」

「なんとも言えばいいさ。俺は欲しいものを手に入れるためには手段を選ばない」

そういうと、ゴールドは右手で数字の2を作った。

「2年後だ」

「2年後？」

「2年後の今日に、お前を迎えに来る。その間に逃げようとは思わないよ。もし、そうしたら、あの一家の命はないと思え。お前は逃げることでできない甘ったれ小僧だということは知っている。おっと、今はただの小娘だったな」

第5話 決意そして明日へ

ゴルドは去り、アルスは一人その場に残された。

（あの一家の命はない……か。きっと、ゴルドのことだから本当に僕がこの村から逃げたら殺すつもりなんだろうな。いや、ひよっとしたら、2年間逃げなくても口封じのために殺すのかもしれない。もともと、僕だけが死ねば全て解決したのに、あの善良な一家までもを命の駆け引きに巻き込んでしまったんだ。僕が死にそこなっただけに……）

アルスの胸中は罪悪感でいっぱいだった。

（今の僕にできる責任の取り方は一つしかない）

村はずれにある地割れ、そこからは深淵の闇がアルスをのぞいていた。

正確な深さは分からないが、ここに身を投げたら命がないことは明白だった。

（もし、僕がこれ以上生きながらえたら、あの一家だけじゃなくて他の村人たちとも付き合いをしていくことになるだろう。僕が村に長居をすればするほど迷惑をかける人数が増えていくんだ。それに、僕が責任をとって死んだと知ったら、いくらあの非情なゴルドでも、

一家を見逃してくれるかもしれない)

心を決めてアルスは深淵の間に歩を進めようとしたが、足が震えて動けなくなった。

(怖い……死ぬのが怖い……)

それはアルスがはじめて抱いた感情だった。

幼いころから戦士として育てられ、不名誉な敗北をしたときには死をもって償えと育てられてきたアルス。

彼にとって、死は躊躇すべきものではなく、不名誉を働いたときには、自らすすんで行くべきものだった。

実際にあの薬を飲む時も、何の疑問も持たずにそのまま口に放り込んだのだ。

だけど、今は死ねなかった。

アルスが崖下に足を踏み入れようとすると、脳裏におじさんやおばさん、レオナルドの優しい笑顔が浮かんでくるのだった。

胸から感情がこみあげ、やがて、暖かい液体が頬を伝ったのだった。

(涙……?)

物心のついたころまで記憶をたどっても、情などというものを理由

にして流した覚えのないもの。

それこそ、戦いで負けたときの悔しさくらいでしか流したことがないもの。

それが今になってあふれ出したのだ。

（誰にも見られてないとはいえ、こんなものを流すなんて恥辱だ。僕は、これでも名門道場で腕を磨いた剣士なんだ）

変わり果てた身になっても、誇り高い戦士としてのプライドがひらすらアルスの胸を締め付けるのだった。

10分間ほど嗚咽をあげた後、ゆっくりと立ち上がった。

「生きたい。帰ろう」

ゆっくりと、それでいながら、薄く積もった雪を踏みしめながら、アルスはもと来た道を引き返した。

その足跡はまるで、生まれてはじめて自分の意志で道を切り開いているかのようだった。

（ポジティブに考えるんだ。チャンスは2年間ある。その間にゴルドを説き伏せるか、あるいは隙を見て殺せばあの一家のピンチは回避できる。少なくとも、このまま死んで償って、見逃してもらおうなどという甘い考えよりは、その方がいくらか分の良い賭けかもしれない）

家についたころには地平線がほんのりと明るくなりはじめていた。
家人は皆、静かに寝静まったままのようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2918y/>

女の子になった少年剣士

2011年11月8日06時03分発行